

人間工学的アプローチを活用したミーティング改善とその評価 ー J 大学硬式野球部による検証ー

情報科学ゼミナール 1215155 古籟 正隆

1. 研究動機・研究目的

本研究の動機としては、「どうしても野球部をより良い組織にしたい」という願望から始まった。順天堂大学硬式野球部は学生野球を伝統としている。この伝統の利点は、自分達でチームをデザインすることができるという点だ。自分達がこだわりをもって活動していけばどこまでも自由に良くすることができる。しかし、これは裏を返せば、自分達がこだわりを持って、明確な基準の元に活動を行わなければ、どこまでも悪くなる可能性があるとも捉えることができる。この基準がないという課題解決のために、一年間取り組んだことが「ミーティング改善」であった。最終的には、最初の願望は「この挑戦のデータを何とか未来の順天堂の為に残す」という動機に進化していった。更にどうせやるならば、組織作りにおいて少しでも役に立ちたい本研究は、J 大学スポーツ健康科学部硬式野球部の試合時の試合前後におけるミーティングに対しての満足度・生産性の向上を目的としたミーティング改善事項が、人間工学的アプローチに基づいているか検証し、その中でも 4M のフレームワークを当てはめ、そのフレームワークと生産性と満足度の相関関係を調査することを目的とする。また、得られた知見を基に、ミーティングの満足度・生産性を上げるための実践例を提供し、スポーツ組織において、組織の改善活動に役立ててもらうための提案を試みた。

2. 研究方法

監督者の指示によってミーティングが改善された夏季(7月)活動開始時から秋季リーグ終了(10月)の間に A チームに帯同した選手、コーチ、主務、トレーナーマネージャー (男性 49 名、女性 5 名)に対して、20 項目の質問表に回答してもらいアンケート調査を実施した。その結果を「無料統計ソフト EZR」というものを用いて、因子分解を行い、その内的整合性を検証した。また、前述の 4 因子と別途集計をしたミーティングにおける満足度・生産性の結果について、Pearson の積率相関係数を用いることによる調査を行った。

3. 主な結果と考察

因子分析で得られた 4 因子 20 問はそれぞれ、カテゴリー1の「Man」、カテゴリー2「Machine」、カテゴリー3「Media」、カテゴリー4「Management」に分けることができた。当初各 5 項目ずつ設定した質問項目であるが、分析の結果、それぞれ 3 問、6 問、4 問、6 問に分類された。この中で最もミーティング参加者の満足度を高めた因子は人間に注目した「Man」因子

であり、生産性を最も高めたものは「Management」因子となった。

相関係数から、生産性と満足度には、高い正の相関を優に超える値 $5.99E-11$ が検出された。この結果から、ミーティングの参加者の満足度を高めることは、ミーティングの生産性を高めるということが分かった。また、2つは相関関係であるため、ミーティングの生産性が向上するという事は、参加者の満足度もそれに伴い向上するという論理が成り立つ。また、満足度、生産性ともに各四因子と正の相関関係にあることが判明したことから、人間工学の考え方をを用いたミーティング改善は効果があると考察することができる。

4. 結論

この結果から個人の満足度を高めることがミーティングの効果を高めることに効果的であることが判明した。また、人間工学は職場だけでなく、スポーツの現場にも有用性があることから、他部活にも容易に置き換えることのできる「環境」「道具」等に着目した改善・質問項目の増加、同部活において歴代のデータを収集し、研究対象数を増やす必要がある。また、室内環境、屋外環境で異なるガイドラインの作成や、職業現場に活かされているノウハウをスポーツ組織において応用した「話し合いの満足度・生産性を高めるガイドライン」等を作成することの必要性が現場に提案できるものとして還元することができた。つまり、本研究によって人間工学的アプローチを用いたミーティング改善は、職場のみならず、スポーツ組織のミーティングの満足度を上げる要因になり、生産性を上げる効果があることが分かった。参加者の満足度の向上が、生産性を高めることを確かめた。

5. 卒業論文の執筆を終えて

学んだことは目的の大切さである。正直、最初は「何のために何故卒業論文を書かなければならないのか」と否定的にとらえていた。しかし、目的が見えないのは、卒業論文に問題があるのではなく、否定的な考え方をしていた自分自身の考え方に課題があるのだという、当たり前のことを執筆中に再確認することができた。これが最大の学びである。実際に書き終えて思うことは、「達成感」と「もっと早く目的と出会ってればという後悔」である。「やれと言われたことをやる」のではなく、「自らやる意味を意味付けしていくこと」ができていれば、もっと良いものができたと思うし、何より自分のやりたいことであるはずだから、事前準備、事前対応をしていたはずだ。そして、本当に人のためになる研究というものが多少なりとも分かったはずだ。「三方良し」の考え方を持って、論文を執筆する先生方は本当に凄いと思う。この経験を行動で活かし、成長を重ね、できなかったことをできるようになり、変わったなと思ってもらうことが自分に今後できることだと考えている。だから、私は能力開発を続け、毎日「意味付け」という小さな一歩を積み重ねていく。今は無理かもしれないが、自分がようやく見つけた目的を果たすため、今日の延長線上にしか未来はないのだと「今」を生きていくことをここに記し、最後の言葉とする。